

『百人一首と歌仙絵』

十一月十二日

「歌仙絵」とは何か



因州池田侯爵家旧蔵探幽筆「百人一首画帖」より柿本人丸

(別冊太陽『百人一首への招待』)

1 歌仙とは

和歌にすぐれた人。(唐の詩人・李白を「詩仙」と称することから)
特に、『古今和歌集』『真名序』で柿本人麿と山部赤人を「和歌仙(和歌のひじり)」とし、また、「仮名序」で紀貫之が選んだ六人の歌人、藤原公任が選んだ三十六人の歌人を、のちの時代に「六歌仙」「三十六歌仙」と称した。六歌仙・三十六歌仙にならって、さまざまな時代に和歌の名手を選び、「歌仙」と称えた。

2 歌仙絵とは

和歌にすぐれた歌人の肖像画。歌人の肖像とその歌人の代表歌を書いたもの。巻物・屏風・画帖・扁額などさまざまな形式のものが生まれた。とくに、神社に奉納する扁額には、歌仙絵が盛んに用いられ、現在でも各地の神社で見ることができる。

「佐竹本三十六歌仙」の中から、特徴的かつ有名な歌仙絵を取り上げ、また同時代および後代の別の歌仙絵と比較する。

ちなみに、鎌倉時代にはいくつかの「三十六歌仙絵」が成立しており、鎌倉時代に好まれていたことがうかがえる。

- ① 上置本三十六歌仙絵 歌人たちの構図は「佐竹本」とほぼ同じ。歌仙絵の下に畳が描かれている。
- ② 業兼本三十六歌仙絵 本文の筆者を平業兼(伝未詳)とする歌仙絵。現存するのは、15点のみだが、模本が伝わっている。構図および和歌が「佐竹本」とは異なるものが多い。
- ③ 為家本三十六歌仙絵 藤原定家の息子・為家が書いたとする白描画の歌仙絵。
- ④ 為氏本三十六歌仙絵 為家の息子・為氏が筆者と伝わる歌仙絵。絵は業兼本とほぼ同じ。

一 僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主

二 柿本人麻呂・山部赤人・大伴家持・猿丸大夫・僧正遍昭・在原業平・小野小町・藤原兼輔・紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑・伊勢・藤原興風・藤原敏行・源公忠・源宗子・素性法師・大中臣頼基・坂上是則・源重之・藤原朝忠・藤原敦忠・藤原元真・源信明・齋宮女御・藤原清正・藤原高光・小大君・中務・藤原仲文・清原元輔・大中臣能宣・源順・壬生忠見・平兼盛

三 鎌倉時代中期に成立した三十六歌仙絵。もとは下鴨神社に伝来し、のちに秋田(久保田藩)藩主・佐竹家の所蔵となった。もとは絵巻2巻の形であったが、大正8年 1919年に、料紙ごと剥がされ分断された。ただし、すでに江戸時代に分断されていた形跡もある。

江戸時代に「佐竹本」の修理をしたのが絵師の狩野探幽であった。「佐竹本」に刺激された形で、狩野探幽自身が描いた『新三十六歌仙画帖』や『百人一首歌仙帖』が美術品としての価値も高い。さらに、慶長年間（1596～1615）に刊行された本阿弥光悦の書による古活字本（版本）、寛永年間（1624～1644）に刊行された角倉素庵の書に歌人の絵を添えた木版本が存在し、現在のいわゆる「かるた」としての歌仙絵に大きな影響を与えていると考えられる。

さらに、江戸時代には、役者絵・美人画などの浮世絵に取り入れられ、さまざまなバージョンの歌仙絵が登場した。

- (1) 柿本人麿
- (2) 猿丸大夫
- (3) 在原業平
- (4) 小野小町
- (5) 紀貫之

(1) 柿本人麿(人丸) ⁴

歌仙絵の古例としては、平安時代後期に、藤原兼房⁵が、夢に現れた「柿本人麿」の絵を絵師に描かせ、和歌の上達を祈ったのが嚆矢とされる。のちに、藤原顕季⁶が人麿の絵を壁に掛け、「人麿影供」という和歌上達を記念する歌会が行われるようになった(『十訓抄』『古今著聞集』など)。この時の絵には「ほのぼのと明石の浦の朝霧に鳥隠れ行く舟をしぞ思ふ」という歌が添えられていた。



「かたはらに年高き人あり。直衣に薄色の指貫、紅の下の袴を着て、なえたる烏帽子をして、烏帽子の尻、いと高くて、常の人にも似ざりけり。左の手に紙をもて、右の手に筆を染めて、ものを案ずる気色なり」(兼房の)そばに年配の人がいた。直衣に、薄色の指貫袴をはき、紅色の下袴をつけ、糊のきいていない柔らかな烏帽子をかぶり、烏帽子の後ろ尻は異様に高い。どうみても普通の人には見えない人だった。左の手に紙を持ち、右の手に筆を染め、何か、物を考えているふうであった。『十訓抄』巻四―二

佐竹本三十六歌仙絵巻(写)(国会図書館デジタルコレクション)

現在、『小倉百人一首』に「人丸」の歌として採用されているのは、「あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」(表紙参照)である。実は、どちらも柿本人麿の歌ではない。「あしびきの」の歌は、御子左家である藤原俊成が、対立関係にある六条藤家と同じ歌を使うのを避けて、『俊成三十六人歌合』に選び入れたためとされる。また、その他の歌が書かれていることもある。

⁴ 『万葉集』では「人麻呂」、『古今和歌集』では「人麿」、『小倉百人一首』では「人丸」と表記するのが一般的

⁵ 1001〜1069 藤原北家・藤原道兼(兼家三男)の孫。奇矯なふるまいで知られる一方で、和歌を好み、能因や相模との交流が知られる。

⁶ 1055〜1123 歌道家流派のひとつ「六条藤家」の祖。



竜田川 もみぢ葉流る神奈備の
三室の山に時雨降るらし

(竜田川には紅葉が流れている。上流にある神のおわす三室山に時雨が降っているからだろう)

『古今和歌集』では「よみ人知らず」の歌。『拾遺和歌集』で「人麿」の歌として入集。衣装はほぼ同じ(菱装束)だが、筆・紙・硯がないことに注意

為氏本三十六歌仙絵 (国立文化財機構所蔵品 (CoBase))

(2) 猿丸大夫

佐竹本三十六歌仙絵 (日本絵巻物全集19

三十六歌仙絵 角川書店)



四位以上が着用する黒袍の束帯姿

業兼本三十六歌仙絵



目と鼻が大きく描かれ猿顔?



『百人一首』光悦筆 (跡見学園女子大学)



光琳かるた

百人一首デジタルコレクション (『別冊太陽 百人一首への招待』)

手を顔に近づけ、苦悩のポーズ？

目と鼻が大きい+苦悩のポーズ？

狩衣姿

遠くを見るポーズ？

(3) 在原業平



佐竹本三十六歌仙絵

為家本時代不同歌合 (ColBase)

(『別冊太陽 百人一首への招待』)

武官姿の業平。弓・胡籥・綾をつける。

国会図書館デジタルコレクション)

右手を顔に近づけているのが特徴。指貫

冠直衣姿の業平。冠の垂纓が前に流れている。

の裾を結び襪(しとうず)は見えない。

扇を開いているのが特徴(女性的)



光琳かるた（『別冊太陽 百人一首への招待』）

袍は夏の直衣に用いられる三重襷文様の縹色。右手を顔に近づけるポーズは為家本を踏襲。指貫から襪（しとうず）が見えている。

この図は有名で、業平と言えばこのパターンとされ、そこから三重襷文様とそのバリエーションの一種が「業平菱」と呼ばれるようになった。

（4）小野小町



佐竹本三十六歌仙絵

（『別冊太陽 百人一首への招待』）

国立国会図書館デジタルコレクション

唐衣・裳をつけた女房装束の後ろ姿

五衣の最上衣の赤・唐衣の翹塵

（きくじん くすんだ黄緑色）は

勅許を得た者しか着られない色（禁色）。

高級女房の姿として描かれる。

顔が見えない後ろ姿であるのは、

「美女」を見るものに想像させるため、とする。

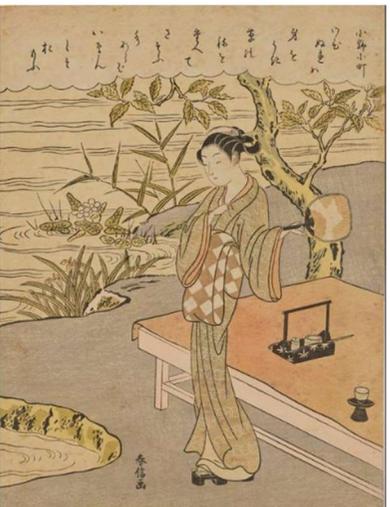


百人一首画帖 (狩野探幽)

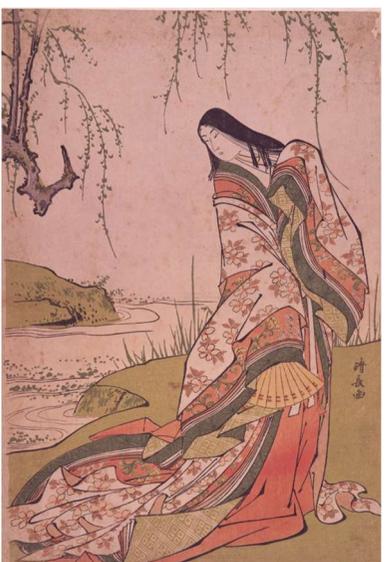


十二単ではなく、「細長」を着ている小町絵。「細長」とは、平安時代の公家の幼児服と年若い女子の晴れ着。または身分の高い女性のくつろいだ時の着物とも。なぜ小町が少女の着物姿で描かれているかは不明。「小町」の「小」若のイメージか？

(跡見学園女子大学 百人一首デジタルコレクション)



浮世絵 小野小町 (鈴木晴信 ColBase)



錦絵 小野小町 (鳥居清長 ColBase)

わびぬれば身を浮草の根を絶えて

衣装の桜が「花の色は」の歌を提示し

誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

河が上記の歌を提示

(5) 紀貫之



佐竹本三十六歌仙絵

〔別冊太陽 百人一首への招待〕

国立国会図書館 デジタルコレクション

狩野探幽によって江戸時代に補われたもの。
黒袍の束帯姿で、後ろに裾が伸びる。
笏を正しく持ち、威儀を正す。(遠くを見る姿?)



三十六歌仙画帖 (住吉如慶)

(和泉市久保惣記念美術館)

デジタルミュージアム

逆さに膝に立てた笏を左手で押さえ、顔
を寄せる姿。歌想を練る姿とされる。



二首本三十六歌仙絵
笏を顔に近づけ、思案顔
(日本絵巻物全集19
三十六歌仙絵 角川書店)



業兼本三十六歌仙絵 (模本)
笏を右手で持ち、膝に立てる姿。
(日本絵巻物全集19 三十六歌仙絵
角川書店)

今回は、『小倉百人一首』の歌仙絵の姿（ポーズ）から、何を表しているのかを
考えていきましょう。

『百人一首と歌仙絵』

十一月十九日

『小倉百人一首』の歌仙絵



紫式部

『錦百人一首あづま織（流布本）』

（跡見学園女子大学 百人一首コレクション）



紫式部

『女房三十六歌仙図画帖』

（斎宮歴史博物館蔵）

3 歌仙絵からカルタへ

(1) カルタの伝来

日本にカルタを伝えたのは安土桃山時代のポルトガルの商人とされる。いわゆる大航海時代には日本に進出した商人たちがひろめたもので、天正〜文禄年間（1573〜1596）には日本に入ってきていたというのが現在の定説である。遊び方もさまざまであるが、そのうちのひとつが、熊本県人吉市に伝わる「うんすんカルタ」である。



うんすんカルタ

ポルトガルから伝わったかるたが日本風にアレンジされたカードゲーム。ポルトガル語で「うん」は「一」、「すん」は「最高」の意。「かるた」も実はポルトガル語。計75枚のカードには、日本、中国、西洋の趣味や風俗が入り混じった独特な絵が描かれている。

（文化遺産オンライン）

遊郭でカルタ遊びをしている遊女が描かれた「婦女遊楽図屏風」（松浦屏風）などもあり、江戸初期のカルタの流行がうかがえる。

(2) 絵合わせカルタ

一方で、平安時代からの伝統遊戯に「貝覆い」というハマグリの貝殻を合わせる遊びがあ

ただし、この屏風は「慶長年間を追憶して描かれた」江戸中期の作品とする説が有力である。

り、ハマグリの代わりに小紙片⇨カルタに図像を描いて合わせる「絵合わせカルタ」が考案された。これは、草花尽くし、鳥獣尽くし、『源氏物語』の絵尽くしなどがあり、二枚ないしは三枚の絵を合わせる遊戯法であったと考えられている。

(3) 歌合せカルタ

江戸時代初期に、細川家では、「古今の札」という遊びがあり、これは『古今和歌集』の和歌について、上の句の初めの五文字と、下の句の初めの五文字（七文字？）をそれぞれ別の小紙片に書いて合わせとる遊びであったという。この上の句と下の句の全句を分かち書きして、対応する二枚の小紙片を合わせとる遊びを細川家の「しうかく院」という女性が考案したという記録がある。⁸これが「歌合せカルタ」の始まりであり、さらに、それに歌仙絵付きの歌合せのカルタに発展していったと考えられている。

(4) 歌合わせカルタにおける歌仙絵

江戸時代の初期・前期に成立した「百人一首歌合せカルタ」は、上の句の札に歌人の肖像画を描き、下の句と合わせとるものだったようである。また同時期の、「百人一首歌合わせカルタ」以外の「歌合せカルタ」では、歌意にちなんだ図像が描かれていた。たとえば「源氏物語歌合せカルタ」や「伊勢物語歌合せカルタ」では、ヒントとなる絵と上の句、文字だけの下の句が描かれた。（次ページ参照） 「百人一首歌合わせカルタ」の歌仙絵は、鎌倉時代の三十六歌仙絵や、それらを参考にして描いた狩野探幽の「画帖」、江戸時代の本阿弥光悦の書による古活字本（版本）、寛永年間（1624～1644）に刊行された角倉素庵の書に歌人の絵を添えた木版本を手本として彩色したものが古形であった（歌人のポーズがほぼ同形）。

⁸ものと人間の文化史「かるた」江橋崇



上の句
春日野の若紫のすり衣
下の句
しのぶの乱れ
限りしられず

絵

二人の女性と、垣間見する男

『伊勢物語』第一段「初冠」
むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。（後略）

元禄期に入ると、画工たちは歌意をこめたさまざまの姿の歌仙絵を描くようになり、多種多様な「百人一首歌合わせカルタ」が誕生した。

また、下の句に挿絵がつく「むべ山カルタ」と言われる賭博性の高いカルタも誕生し、このカルタの挿絵は、歌意をもじった「俗」な戯画であることも多かった。



「むべ山カルタ」（嵯峨嵐山文華館）
殷富門院大輔

見せばやな雄島のあまの袖だにも ぬれにぞぬれし色はかはらず
（あなたに見せたいものです。松島にある雄島の漁師の袖でさえ、波をかぶって濡れに濡れても色は変わらないというのに。私は涙を流しすぎて血の涙が出て、涙を拭く袖の色が変わってしまいました）

下の句の絵
赤い紙の上に置かれた小判↓小判は色が変わらない
（下の句の「色はかはらず」からの戯画）

4 『小倉百人一首』の歌仙絵

右上段：江戸時代（1775年刊）『錦百人一首あづま織（流布本）』

（跡見学園女子大学 百人一首コレクション）

立ち姿が多く、独自色の強い歌仙絵 以下の伝統的な歌仙絵と一線を画す

右下段：江戸時代（寛文年間）『探幽百人一首画帖。』（跡見学園女子大学 百人一首コレクション）

左上段：江戸時代（元禄以前）『滴翠美術館所蔵道勝法親王筆 百人一首絵入り歌かるた』

（図説百人一首 石井正己 河出書房新社）

左下段（参考） 現在市販されている百人一首カルタ（銀鳥産業社）

3番歌：柿本人丸 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながし夜をひとりかも寝む



。画像は、狩野探幽の『百人一首手鑑』の写しで成立年は不明。寛文は1661～1673年
。従来は、慶長・元和年間（1596～1624）に制作された最古の百人一首歌カルタと考えられていたが、江橋崇氏の説に従い、元禄（1688～1704）頃の成立とする。

5 番歌 猿丸大夫 奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき



光悦筆『百人一首』



9 番歌 小野小町 花の色はうつりにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに



17 番歌 在原業平 ちはやぶる神代もきかず龍田川 からくれなるに水くくるとは



22 番歌 文屋康秀 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしといふらむ



33番歌 紀友則 ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ



35番歌 紀貫之 人はいさ心も知らず ふるさとは花ぞ昔の香にほひける



43番歌 権中納言敦忠 逢ひ見ての後のこころにくらぶれば 昔はものを思はざりけり



48番歌 源重之 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ 砕けてものを思ふころかな



57番歌 紫式部 めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に 雲がくれにし夜半の月かな



『女房三十六歌仙図画帖』
(斎宮歴史博物館蔵)

見し人の煙となりし
夕べより
名ぞむつましき塩釜の浦

(親しんでいた人⇨夫が煙
となつて消えてしまった夕
以降、「睦まじ」という音に通
う「陸奥(むつ)」の国の「塩
釜の浦」でたなびく、塩焼き
の煙までもが慕わしく感じ
られることだなあ)

※夫・藤原宣孝の死後、この
世のはかなさを嘆いていた
紫式部が陸奥国の名所絵を
見て詠んだ歌。



62番歌 清少納言 夜をこめて鳥のそら音ははかるとも 世に逢坂の関はゆるさじ

60番歌 小式部内侍 大江山いく野の道の遠ければ まだふみも見ず天の橋立

66番歌 (前) 大僧正行尊 もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし

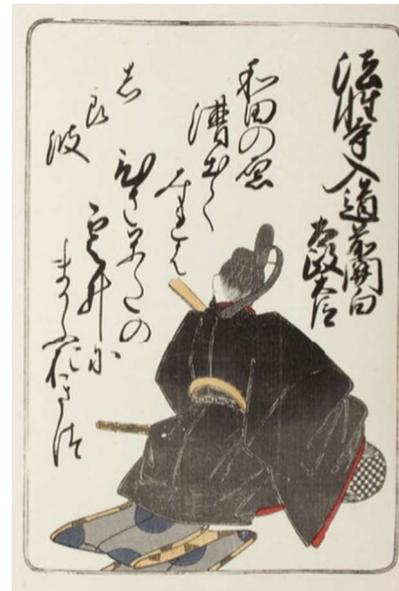


74番歌 源俊頼朝臣 憂かりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは祈らぬものを



76番歌 法性寺入道前関白太政大臣

わたの原こぎ出でて見ればひさかたの雲居ひまがふ沖つ白波

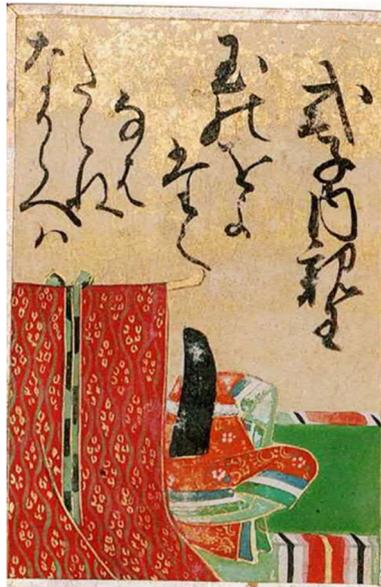


80番歌 待賢門院堀河 長からむ心も知らず黒髪の みだれて今朝はものをこそ思へ





90番歌 殷富門院大輔 見せばやな雄島のあまの袖だにも 濡れにぞ濡れし色はかはらず



89番歌 式子内親王 玉の緒よ絶えなば絶えね ながらへば忍ぶることの弱りもぞする



97番歌 権中納言定家 こぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩の身もこがれつつ



『探幽百人一首画帖』相模



佐竹本『三十六歌仙』小野小町



参考文献一覧
書籍

- 『ものと人間の文化史 かるた』江橋崇（法政大学出版局）
『ビギナーズ・クラシック 日本の古典 三十六歌仙』吉海直人編（角川ソフィア文庫）
『三十六歌仙絵』新修日本絵巻物全集（角川書店）
『歌仙絵』東京国立博物館
『百人一首と歌仙絵』寺島恒世（総合研究大学院大学文化科学研究所 日本文学研究専攻）
『歌仙絵・百人一首絵』森暢（角川書店）
『百人一首の現在』中川博夫・田淵句美子・渡邊裕美子（青蘭舎）
『ものと人間の文化史 百人一首』江橋崇（法政大学出版局）
『図説 百人一首』石井正己（河出書房新社）
『人麿影供900年 歌仙と古筆』（出光美術館）

雑誌

- 「佐竹本三十六歌仙 美の流転」 淡交社（令和元年 九月号 淡交社）
「百人一首への招待」 別冊太陽日本のこころ（2013年 冬 平凡社）
「百人一首入門」 淡交ムック 淡交社（平成16年 冬 平凡社）
「百人一首」 別冊太陽日本のこころ（1993年 冬 平凡社）

HP

- 跡見学園女子大学 百人一首デジタルコレクション
国立国会図書館デジタルコレクション
古典籍ポータルデータベース
国立文化財機構所蔵品 ColBase
日本カルタ文化館
斎宮歴史博物館
日本服飾史